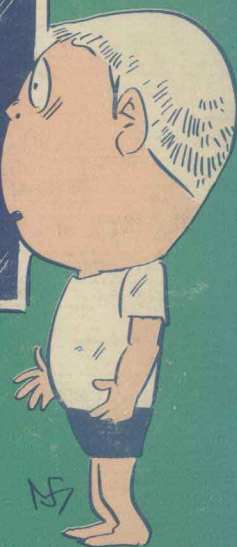
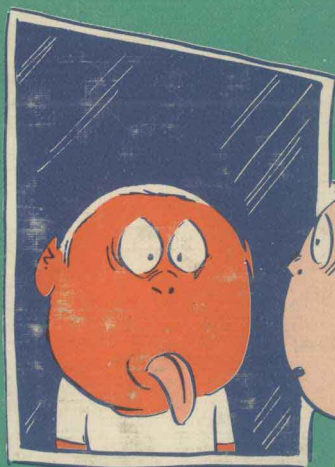


ほんまにオレは アホやろか

水木しげる



のびのび人生論 7

ほんまにオレは
アホやろか



のびのび人生論 7 **ほんまにオレはアホやろか**

1978年 9 月 第 1 刷 1981年 6 月 第 6 刷

定価 900円

著 者 水木しげる（みずきしげる）©

発行者 久保田忠夫

発行所 株式会社 **ポプラ社**

160 東京都新宿区須賀町 5 振替東京4-149271

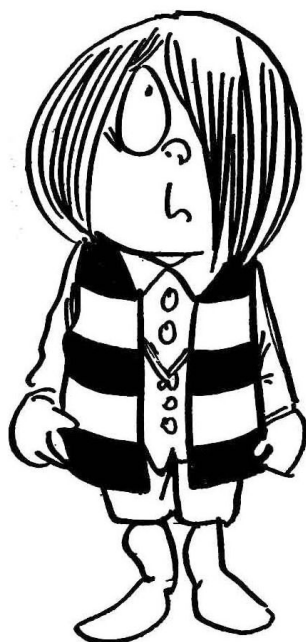
印 刷 新興印刷製本株式会社・有限会社トラヤ印刷所

製 本 大成紙工業所

N・D・C 159

8012—086007—7764

ほんまにオレはアホやろか
もくじ



6 「こいつあ、アホとちゃうか」

16 へんな美術学校

24 落ちたのは一人

32 男らしい仕事？

39 靴をはかずに新聞配達

47 ドロボウと流行歌手

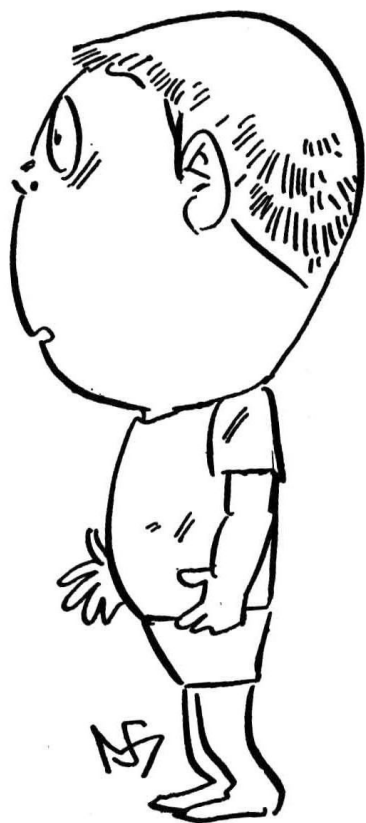
- 57 夜なら頭がさえると、夜間中学に
支那通信
- 61 ぼくは落第兵
- 70 エブベとなら
- 93 腕の手術をうけた相模原病院
- 102 魚の名も知らずに、魚屋開店
- 112 右手で筆記して、左手でほじくったら
- 119 マントの下は禪
- 126 さまざまな間借人
- 134 東京の大先生
- 143 バチンコ屋
- 150 テレビ出現、紙芝居があぶない!!
- 156 「三十八だ、嫁さんもらえ」
- 163 毎日が戦い
- 172 「墓場の鬼太郎」が誕生
- 177

220	209	203	198	192	185
あとがきにかえて	気ままな土人たち	眠りに弱い男	怪奇ものをやらせてください	借金やら、倒産で……	「鬼太郎夜話」「河童の三平」をかく

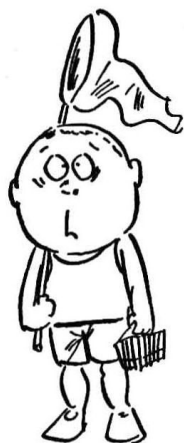


デザイン——堀木一男
イラスト——水木しげる

ほんまにオレはアホやろか



「こいつあ、アホとちゃうか」



ぼくは鳥取県の境港市さかいみなとというところで生まれた。

健康でもものすごく、よく寝る子どもだった。そこへもってきて、人のいうことをきかない上、舌したがあつくてしゃべれない。

しゃべれないくせに、自分の思いどおりにくらす、といった子どもだったから、三人兄弟のうち、兄と弟は幼稚園に行ったが、どうしたわけか、ぼくだけは行かされなかった。たぶん、規格きかくにはまらない子だし、朝寝ぼうだからと、両親が遠慮えんりょさせたのだろうか。ここですでに、ある種の落第がはじまっていたようだ。

小学校は義務教育だから、何の心配もない。学校というものが、すべて小学校みたいであれば

それは、それでいいと思う。

小学校時代は、ガキ大将と趣味の生活だった。

ガキ大将というのは、子どもの世界の指導者だ。腕力が強くなければいけないが、それだけではない。子どもの生活である遊びの方もうまくとりしきらなければ落第する。適当に武力を誇示しなければいけないが、弱い者いじめをするとクレーダーによって失脚してしまう。なかなかむずかしいものなのである。

幸い、ぼくはメンコや水泳が得意だった。海が近かったので、子分の泳ぎを指導したり、寒い間はメンコ合戦を主催したりした。

それに、弱い者いじめもきらいだった。強い者とか上級生とケンカするのは好きだった。それは、ボクシングでいうと一つ上の級で争うことになるからだ。女の子はいじめなかった。女の子とは、昔は、遊びがちがっていたのである。そうでなくても、ぼくは女の子は好きだからいじめなかった。

ガキ大将の仕事でいそがしかったから、勉強はやるひまがなかった。それに、奇妙な愛きょうも手つだって先生は、あれは特別だからと、おかしなソンケイまでされるようになった。それで、ますます勉強しなくなった。

学校の勉強はしなかったが、自分の好きなことに熱中した。それが、ここにいう趣味である。昆虫や貝殻や海草などをやたらとあつめて、押入れの中にためこんだり、スケッチしたりして、その世界にいりびたることをたのしんだ。

メンコのふだに工夫してつよいふだにしたり、風なんかも自分でつくった。

二十日ねずみや山羊などを飼ったこともある。

それから、妖怪や伝説の研究。

これは、近所に伝説や宗教にくわしいばあさんがいて、いろいろ教えてくれたのだ。

今から数十年前には、どの地方の町や村にもこんなばあさんが一人や二人はいて、不気味な、それでいて味わいのある話をしてくれたものなのである。

ばあさんは、山へつれていってくれば山の妖怪、海へつれていってくれば海の妖怪、というように、あたりに満ち満ちている自然の精霊というものについて話してくれた。

ばあさんは、七夕になればその由来、とんどさんという正月のしめなわを焼く行事になればそのいわれ、そういったものをぼくに教えてくれた。

ぼくは、ばあさんの話を聞きながら、祖先の霊が自分の心の中に入ってくるような感じがしていた。



とくにそんな気分をもらあげてくれるのが、お盆の行事だった。

祖先の霊が帰ってくるというので、町中が霊をむかえるしたくをする。

ぼくはその独特のフンイキが好きだった。

海に、野さいをのせたワラ船やら燈籠やらを流すと、ゆらゆらゆれながら進んで行く。それを

見ていると、海のはるかむこうに、こういうものが流れつく場所があるような気がしてくるのだ。

ばあさんは、それが十萬億土という極楽のような所で、霊が住んでいる所だという。

そういわれると、目で見ただけではなくとも、なんとなくそんな気がしてくるのだった。

また、町のあちこちにある神社や祠もそうだった。

ぼくは、神社や祠の前を通りかかるたびに、こんなふうに祀つてあるかぎりは、何もないわけ

はないと思い、社に破れ目でもあれば中をのぞきこんだりしていた。

ある日、町に大きな火事があった。たくさんの家とともに、神社も焼けた。

ぼくは、燃える神社から何か逃げだしたのではないかと考えた。神社の焼け跡にたって考えこ

んでいると、同級生が、

「火事の時なあ、神主さんが御社の中から大きな石を持って逃げんさったぞ」

という。

「すると、御神体は石だったんか」

と、ぼくは思った。しかし、石は石でもただの石ではないだろう。きっと、何か不可思議の作用で、霊の世界につながるような石なのだろう。こんなふうに、あとで考えた。

こうして、小学校の六年生まで来てしまった。

ガキ大将としては、町内一の遠泳をほこり、あいつぐ戦争ごっこやメンコ合戦でも勝利をおさめ、子分までできていた。

趣味の方では、あらゆるコレクションがふえ、妖怪や伝説にもくわしくなっていた。

しかし、六年生になると、受験という難関が待っていたのだ。

戦前は、小学校までが義務教育で、その上は、無試験の小学校高等科を二年間やって職業につくコースと、入試を受けて中学校へ進む進学コースとにわかれていた。

ぼくの近所は、いなかなのにわりと進学熱がさかんで、クラスの半分近くが中学へ行くコースを選んだ。ぼくも、成績のことはまったく気にせず、すっかり中学へ行くつもりでいた。

ところが、母が先生に相談すると、

「受験してもダメでしょう」

と、あっさりいわれた。

母は驚いたがこれはむりもないことだった。なにしろかんじんの算数がぜんぜんできなかった。家で勉強しなかったのはもちろんのことだが、学校でだって勉強はしない。

遅刻にしてからひどかった。とくに冬は寒いので、九時ごろまで寝ている。

兄や弟は、とくに起きて、朝食もまともに食わずに学校にすっとなで行くのだが、ぼくはゆうゆうと起きだして、兄や弟が食いそびれたぶんまでも全部たいらげてから登校するのだ。人と体内時計（生物時計）ともいうべきものがちがうのだ。

これでは、一時間目がまにあうはずがない。一時間目は算数の授業なのだが、それが終わってから登校していたんじゃあ、いい成績のわけがない。算数の試験はいつも0点だった。そのかわり、よく太った元気な子どもで、毎日が楽しかった。

もちろん、そうなるまでには、母や先生にもずいぶんしかられたが、あまりにもいうことをきかなかったからしくたびれたのだろうか、そのうちに大目おめにみてるようになったわけだ。遅刻をしても、先生もおこらず、生徒もふりむきさえしない。ぼく以外の生徒が遅刻すれば、先生はおこり、生徒はケーベツのまなざしで見つめたものだが。もっとも、ぼくはそうされたいてこたえなかった。それまでにはうんとなぐられていたので、面おもての皮もずいぶんあつくなくてい

たから。こうして、ぼくは治外法権的存在^{ちがいほうけん}になっていたのだ。

だが、ぼくにしてみれば、これは、楽しく生活をするわが道を行く生き方なのだった。いや、これは生き方というよりも、タチだったのかもしれない。

大地の神々がぼくを守ってくれているというようなことを本能的^{ほんのうてき}に考えていたのだ。この地上に生まれてきたからには、その地上の神々がぼくを生かしてくれるにちがいない、大地の神々にそむくようなことをせずにいれば、あくせくする必要はない、他の人の目から見れば不真面目^{ふまじめ}でも、ぼくの生き方こそ真面目^{まじめ}なのだ、こう考えていた。

これは、どうやら、趣味で知った虫や妖怪の生き方に影響されたものようだった。

だが、ぼくの生き方と、中学の試験は、あいいれないものものようだった。

とにかく、中学の試験は受けてもダメだということになった。算数が0点ではどうすることもできないのだ(当時の試験科目は、算数と国語だった)。

それで、ぼくは、小学校高等科の方へ進んだ。

すなわち、ここでは戦わずして落ちたわけだ。

高等科の二年間も、あいかわらず、ガキ大将と趣味ですごした。

やがて、高等科二年を終了した。ここから上級学校へ行けないこともない。しかし、やはり試

験はある。高等科の間に勉強でもしていればともかく、ガキ大将と趣味にあけくれていたので、依然として算数がダメ。とうとう就職することとなった。

大阪の印刷屋につとめることにきまった。

当時は、石版印刷というのがさかんで、その石版の字や絵を修正する仕事だった。

さて、大阪まで来て、住みこみで仕事を始めると、それまでとは勝手がちがう。南京虫にかみつかれてろくろく寝られないところへもってきて、朝早く起こされる。寝るのが大好きなぼくは、慢性の睡眠不足になり頭がぼーっとなってしまう。ねそべって新聞を読んでいる主人の頭を座ブトンとまちがえてふみつけるといふ大失策をやらかして、たちまちクビになってしまった。

運よく、またべつの印刷所に就職できたものの、ここもうまういかなかった。

仕事は使いばしりばかりで、自転車で印刷機具をはこぶのだった。これ自体は、ぼくにはよかった。自転車であちこち走りまわれば、いろんな所が見られるので楽しいからだ。しかし、ついで、楽しさに熱中してしまう。仕事の途中で、太鼓屋を見つけ、太鼓をつくるようすがおもしろいので、一日中見ていたりするものだから、

「こいつあ、アホとちゃうか」

ということになって、これまた、たちまちクビ。